

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第26回 入院から学ぶこと その①

自分の不節制から糖尿病が悪化して緊急入院することとなった。ゴールデンウィークに入る間際の4月28日の午前中だった。血糖値が450を超え、HbA1cも11・0の異常値を示したのが原因だった。体調的にはそんなに辛くはなかった

診るのは“病気”か“人”か

が、数年前初めて緊急入院したときと同じ程度の数値を示したことで、今回入院を決意することになった。

がん、糖尿病、心筋梗塞を経験してきた私だが、糖尿病は一番始末が悪い。食事制限がきついで、入院時は今回はなんとしても「ご飯だけは全部食べたい」と思って入院したつもりだった。

最初の1週間はなんとかクリア出来たが、2週目に入ると御膳を見ただけで中身を見ないで食欲を減退させてしまった。

あまりに不味い食事が出てくるからだ。従って「食事が出来ない」「インシュリンも打てない」という日が3日ほど続いた。

「何のための入院なんだろう。」

栄養士を呼んだ。「食べさせるための食事が先か」「規定通りの食事を提供するのが先か。決

められた糖分とカロリー。その中でいかに患者に食べさせるかを問うた。食べられることが出来る食事を提供し、その上でインシュリンを打つことが求められる。いったん拒否反応を示してしまった自分の身体と心がいかにその気にさせるかが大切なんだ。

ここで感じたのは「人を見るか」「病気を診るか」のせめぎ合いなのだろうか。「在宅医療」を見聞きしてきた私にとって「医療の質の違い」が

目に付きたした。データに基づき、患者と医療者の密なる関係で生活を支えることを主眼とする

「医療」。データが優先する病院医療。それは確かに必要だが、それだけが正解とは限らない。

栄養士が医師と掛け合ってくれて食べられる食事が出てくることになった。塩分濃度を6%以下から10%以下に変更してもらった。制限するだけが治療ではない。何とか食べられているので治療は継続している。順調に数値は減少している。

入院してから11日目、急に気分が悪くなり、吐き気をもよおした。(次号に続く)